

# 装飾墓の時空

河野一隆

## 1. 歴史哲学における構造と文化

主体的かつ任意に設定された歴史的な現在から、過去を時間軸に沿って整理した認識体系をいわゆる歴史と呼ぶならば、過去の総体に対して時間を積分し構造化された実体を歴史認識と呼ぶことは果たして可能だろうか？過去が捨象され積層していく機構を解析するために、かつてM. サーリンズが正しく指摘したような文化の機能への視座を欠くことはできない。ならば、考古学が層位学と型式学から物質文化を再構成するがごとく、構造化された過去と抽象化された物質・非物質を問わざる文化から、歴史哲学を構築、共有、継承していくための認識の深化をはかることにも、幾許かの意味が認められるべきだろう。人類史を顧みれば、直接的な交流が無くても共通・類似した文化要素が登場することは珍しくなく、古くはJ. フレイザー<sup>(註4)</sup>を挙げるまでもなく、伝播論あるいは機能論の観点からの説明が繰り返され、蓄積されてきた。かつて文化構造論を提唱して王墓の登場と変遷過程とを論じ、歴史と文化の構造化の問題提起をはかったこと(以下、前稿)<sup>(註5)</sup>に続き、本稿ではその視角を共有しつつ装飾された墓葬(装飾墓)が登場する背景と墓葬の変遷過程における位置付けとを、議論したい。

前稿にしたがって、再度、文化構造論の定義をしたい。文化は生物としての人間が生存するために、本源的に所有されるものだから、分節化することができない。したがって、総体として認識することを前提とした文化の関係性を構造的に捉え、それを異文化との比較によって自文化を再構成するための理論である。構造とは、外的に個々の人間が所有するものではなく、実在的で社会的な共同意識であると規定される。したがって、文化構造論の射程とは、文化を有機体構造と同一視した上で、その決定あるいはその変化に貫徹する原理を見出し意味を与えることであり、その意味で過去を問題とした場合に歴史研究の方法とも触れ合うことになる。歴史と構造を繋ぐものは文化であり、文化構造に対する洞察なしに歴史認識を深めることはできないと結論できよう。

その歴史認識のあり方には、大きく以下の2つの道に整理することができる。第一は社会を一定で固有な構造物であると考えて、様々な諸現象の内的連関を問題にしつつ、全体の質的差異を認識していく立場、今一つは現象を詳細に記述して典型的に把握し、本質を規定することによって全体の認識へと至るものである。ここでは、後者の立場をとる。

次に墓葬の変遷過程の世界的な記述および比較分析を行なう場合に、まず障害となるのは地域区分の問題である。<sup>(注6)</sup>ある特徴的な要素で象徴される墓葬は、時期的・地域的な傾斜分布が認められる。したがって、その周縁的な時期、地域において位置付けが困難な墓葬が観察されるのは珍しくはない。したがって、墓葬の本質を規定する場合には、任意に括られた時期や地域から帰納的かつ主体的に導かれた上で、それを同様の方法で抽出された他者と比較検討する過程で相互に規定されるものでなければならない。言うなれば、墓葬の本質は比較による全体把握によってのみ可能とされるのであり、その逆ではない。

## 2. 作業仮説の策定

そこで人類史における墓葬変遷過程を比較すべき地域単位として、次の32地域を抽出した。いわば特徴的な墓制が看取される地域である。

- (1)エジプト、(2)スーダン、(3)メソポタミヤ、(4)チュニジア-アルジェリア、(5)ギリシャ、(6)エーゲ、(7)マケドニア-ヘレニズム、(8)フェニキヤ、(9)ローマ、(10)エトルリア、(11)アナトリア、(12)湾岸-ペルシャ、(13)ヨーロッパ(巨石モニュメント)、(14)ケルト、(15)アングロサクソン-バイキング、(16)スキタイ(西部)、(17)アルタイ、(18)匈奴-突厥-遼、(19)中国-極東、(20)バクトリア、(21)インダス、(22)南インド、(23)ペルー、(24)マヤ、(25)北アメリカ、(26)オーストラリア、(27)ポリネシア・メラネシア・ミクロネシア、(28)ジムバブウェ、(29)ナイジェリア-ベニン、(30)アマゾン、(31)タイ-東南アジア、(32)トラキヤ



第1図 本稿が対象とする地域

このうち (21) インダス、(22)南インド、(25) 北アメリカ、(26) オーストラリア、(27) ポリネシア・メラネシア・ミクロネシア、(28) ジムバブウェ、(30) アマゾン、(31) タイ・東南アジアについては、王墓と目されるような共同墓地から突出し、複雑化した墓葬は未だ見つかっていない。けれども加飾された墓葬が、共同墓地から差別化された位置を占めると考えられ、装飾墓と王墓の登場と展開過程の中でその関連性を検討することは、文化構造論の検証実験のために格好の仮説が提示されよう。

以上の時期・地域的に区切られた諸地域は、主体となる墓葬を核として階層・地域・時期による格差等に由来した変異を複合した単位であり、ここでは暫定的に墓葬単位と名付けておく。この墓葬単位は、多様な伸縮可能性を内包するため、2次元地図上で表現する場合には不適切な概念である一方で、他方、墓葬単位同士の影響関係についての議論をする場合には避けて通れない。さらに限定された一部の階層が、例えば、ヌビア(スーダン) やスキタイの王墓のように、時期的に先行する墓葬単位から墓葬の構成要素が、その外部に位置付けられる任意の墓葬単位へと伝播し、ある特定の階層に継承されていくといった事象が観察される場合がある。これを墓葬単位の続縁関係と称する。これは、上述したごとく異なった墓葬単位間で構築される場合もあれば、中国のように地域的に重なりを持ちつつ、時代的に再生・反復される場合もある。あるいは、物質的な伝播ではなく刺激伝播によって受容地域では別の要素として読み替えられる場合もある。そこで試みに、先述した墓葬単位を続縁関係に整理してみると、A:(1)エジプト-(2)スーダン、B:(4)チュニジア・アルジェリア-(8)フェニキア、C:(10)エトルリア-(9)ローマ、D:(6)エーゲ-(5)ギリシャ-(7)マケドニア・ヘレニズム、E:(16)スキタイ(西部)-(17)アルタイ-(20)バクトリア-(18)匈奴・遼・突厥、F:(13)ヨーロッパ(巨石モニュメント)-(14)ケルト-(15)アングロサクソン・バイキング、G:(3)メソポタミア-(12)湾岸・ペルシアである。

さらに墓葬単位内で特定個人の視覚的な隔絶性を表現しつつ共同墓地から析出されていく過程をたどることが出来る場合があり、それを前稿にしたがって「世代関係」と称したい。

**第1世代** 埋葬法の差は出自や性別といった地縁的・血縁的な原理で規定され、共同墓地を構成する。

**第2世代** 共同墓地から特定個人の墓葬が析出され、埋葬以外の付属施設(祠堂など)が付加されて、複合体が成立する。これに伴って、墓碑・墓室装飾・犠牲坑(殉葬墓)が構成要素に加わる。墓域は階層別に占地する傾向がみられるが、埋葬法の階層的な規制は次世代と比較すると希薄であり、王墓が貴族墓として模倣されることもある。

**第3世代** 王墓複合体が被葬者生前に造営される(寿陵)となり、埋葬法の変遷過程の中

でも最大規模の埋葬法が達成される。複合体は被葬者と祖霊とを恒常的に祀るための施設が墓葬と一体化して配列される。階層的規制が強化され、計画的な墓域の配置と構成とが貫徹する一方で、複合体も特定の場所に固定されることなく移動することもある。

第4世代 複合体が断続的に反復されつつ収斂し、急速に解体してゆく。墓葬の階層的規制は前代と比較すると弱まり、量的格差のみが顕現するが、徐々に埋葬法の以外の要素によって階層性を表現することへと移行してゆく。

以上、7つの続縁関係と4つの世代関係を作業仮説として、墓葬単位ごとに整理しつつ装飾墓の登場と展開過程について簡潔に概観してみたい。<sup>(注7)</sup>なお、本稿が対象とする装飾墓とは、原則として墓室内の彩色または彫刻(レリーフ)装飾を主として、次いで外表装飾に言及し、周辺の付属施設(墳墓と祠堂とが複合した廟の一部を構成する建物など)に装飾がある場合は除外したい。<sup>(注8)</sup>

### 3. 人類史における墓葬の変遷過程と装飾墓

エジプト(1)ーヌーダ(2) エジプトの第1世代では屈葬、屈肢葬を基本とし土器や石製パレットなどの副葬を特徴とするが、すでに上エジプトのヒエラコンポリスH号墓で世界最古とも言うべき装飾墓がすでに登場している。煉瓦製で漆喰で内貼りした墓室内壁にはゴンドラ形の船や狩猟文を描く。これは同時期(ナカダ2期)の彩文土器と共通するほか、メソポタミアからの影響も指摘されており、先王朝～初期王朝にかけてのエジプト墓葬の特徴を共有している。第2世代になると宮殿外観を模倣したマスタバがサッカラ中心に造営されるが、墓室内の彩画装飾の有無については明らかではない。第2世代の嚙矢を示す、ジョセル王の階段ピラミッドでは青色ファイヤンスの墓室装飾が知られるが、クフ王墓では女室が簡素であり、再び墓室装飾が顕現するのはピラミッドテキストが顕在化する第5王朝以降と見られる。さらに第4世代には彩色されたレリーフが、貴族のマスタバ内の墓室壁に表されるようになり、墓葬の規模縮小の一方で装飾墓は表現力豊かに展開することが特徴である。エジプト墓葬を継承するヌビアでは、ナパタ・メロエにピラミッドを模した王墓が造営されるが、クッルなどに装飾墓がみられる。

チュニジア・アルジェリア(4)ーフェニキア(8) 地中海交易で栄えたチュニジアのケルクアンにも装飾墓が造られている。カルタゴ人の都市遺跡から離れて営まれた共同墓地内に、タニト神や動物・家屋などの文様が墓室内に彩色表現された墓が登場するが、墓地内でも特殊な存在である。一方、フェニキア人の本拠地であるパレスチナにはカルタゴのような彩色壁画墓は顕著ではなく、エジプトとの関係が強いかもしれない。また、ポエニ戦争以降は、王墓はアルジェリアのマウレタニア王家の墓などに見られるが、外表装飾

にドーリア式神殿柱の装飾があるけれども装飾は顕著ではない。

エトルリア(10)ーローマ(9) エトルリアはヨーロッパでも装飾墓の伝統が顕著に見られる地域の一つで、トルキニアでは共同墓地を構成する地下式の墓室内にさまざまなエトルリア人の風俗や幾何学文、他界観などを表した彩色壁画墓がみられる。さらに、イタリア中部のチェルヴェテリにあるバンディタッチャ墓地では、墓室を家に見立てたレリーフ墓もエトルリア墓葬単位を代表する装飾墓であり、夫妻を表現した陶棺などとも併せて、来世にも現世同様の生活を想定したエトルリア人の死生観を表現している。ローマの墓はアウグストゥス帝墓と祠堂と複合した第4世代の墓葬には、複雑化した装飾墓が成立しているが、これはエトルリアの墓葬伝統の延長上に乗るものだろう。

エーゲ(6)ーギリシャ(5)ーマケドニア・ヘレニズム(7) エーゲの墓葬単位はクノッソス宮の王家墓地であるイソパタやミケーネの円形墓地やトロス墓などが想起されるが、墓室内装飾に彩色や彫刻などが施された例を知らない。続く原幾何学様式期や幾何学様式期には火葬が導入されるため、骨壺としてのアンフォラには華麗な装飾が施されるが、装飾墓の伝統が再生するのは、墓碑や彫像が登場する古拙期以後であり、古典期になって神殿形祠堂と複合した王墓が成立するとギリシャの都市国家の植民活動の拡大と共に地中海沿岸各地へと展開していく。一方、マケドニアのヴェルギナにはフィリップ二世墓をはじめとした2基の王墓が築造されており、内部には大理石を加工した複雑精巧な墓室装飾が知られている。さらに古典後期からヘレニズム期にかけてマケドニアの墓葬単位では墓室内に壁画を描くものが多く、ここに当地の装飾墓の伝統は頂点に達するとみて良いだろう。

スキタイ(西部)(16)ーアルタイ(17)ーバクトリア(20)ー匈奴・遼・突厥(18) ユーラシアの草原ステップでは、スキタイのコストロムスカヤ遺跡、エリザベティンスカヤ遺跡、アルタイのパズィリク遺跡などで王墓は見られるが、墓室内に装飾を施すものは多くはなく、鹿石や石人などの墳墓外表部分に装飾性の高い標石施設を持つものが見られるに過ぎない。さらに、バクトリアの王墓としてチリヤテペ、匈奴の王族墓としては、ノインウラ(ノヨンオール)が挙げられるが、装飾墓は認められない。東端の遼(契丹)には慶陵で人物山水を描いた墓室壁画が見られるが、これは中国の墓葬単位との関連性を考慮すべきだろう。

中国ー極東(19) 中国では新石器時代以降、特定個人墓を析出する動きが南北で顕現する。北部では紅山文化であり、南部では良渚文化の各墓葬であり、共に第1世代に該当する。第2世代を代表するものとして西北崗や後崗に築造された殷代の大墓が挙げられ、青銅彝器の階層的保有が観察される。さらに婦好墓では墓上に祠堂が営まれ、地上標識が殷大墓に普遍的であったかは類例の増加に期待せざるを得ない。また、戦国時代では山西



1. エジプト・ヒエラコンポリスH墓(模写)  
(イギリス・アシュモリアン博物館)



2. エジプト・サッカラ階段ピラミッド外壁



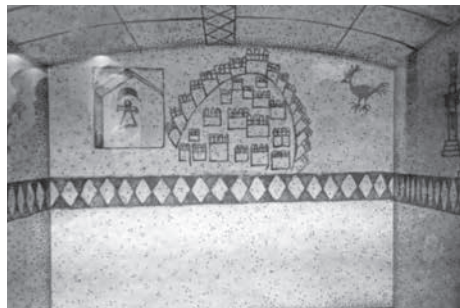
3. エトルリア・チェルベテリレリーフ墓



4. エトルリア・タルキニア壁画墓



5. アイルランド・ニューグレンジ墓



6. チュニジア・ケルクアン壁画墓



7. トラキア・カザンラク壁画墓



8. 中国・西安永泰公主墓

第2図 多様な装飾墓(小堀昇氏撮影(2~8))

省陶寺遺跡など地方諸侯の首長墓の中に質量共に隔絶し、共同墓地から飛び出した墓葬が見られる。第3世代の象徴的存在は秦始皇帝陵である。高く盛り上げられた墳丘や長方形の陵園区画壁、兵馬俑坑など前代から差別化される要素は少なくなく、それはひとり始皇帝のカリスマ性のみには帰されるべきではないだろう。かくして成立した、中国における王族や諸侯をの陵墓を規定する緒制度は、陵寝制度として後代の墓葬にも継承・貫徹されるほか、王朝の正統性の担保と相俟って非漢族系王朝にも大きな影響を与えることとなる。装飾墓について見ると、第2世代の殷～戦国時代は不明な部分が少なくないが、漢代には墓室彩画が存在し、画像石墓や六朝の壁画墓、塋室墓など独自の装飾墓が展開し、中国周縁文明圏にも影響を与える。極東では最も彩色墓が顕現するのは中国東北部から朝鮮半島北部にかけての高句麗と日本列島である。前者は墓主像と被葬者の事績、四神図など、後者は幾何学文様が主体であり、地域的にも偏っている。

ヨーロッパ(巨石モニュメント)(13)ーケルト(14)ーアングロサクソン・バイキング(15) ヨーロッパは先史時代より後に装飾墓が消える特異な地域でもある。ヨーロッパの巨石文化は古くから注目され、フランス北西部からイギリス南部では巨石文化は認められるけれど、装飾墓が顕著なのはアイルランドである。とくにニューグレンジ墓では墓室入口付近に渦文が彫刻された装飾石材が用いられている。しかし、ケルトの戦車墓には副葬品の階層性は認められるけれども装飾墓はなく、アングロサクソンの王墓として代表的なサットンフー遺跡でも、船葬墓という特異な形態ながら装飾墓ではない。

メソポタミア(3)ー(12) 湾岸・ペルシア メソポタミアでは、南部の仰臥伸展葬で手を腹の前で交差させるウバイド文化の墓葬、北部に見られる強い屈葬が特徴的である。土偶や土器など、副葬品も簡素であるが、第2世代の王墓は南部のキシユヤウルで見ついているが、特にウルで検出された16基の王墓は煉瓦製の墓室を構築し、金銀器や装飾品、武器や楽器などの豊かな副葬品を伴い、多量の殉葬者が捧げられている。墓室には加飾された部材痕跡も報告されているが、装飾墓の全体像については不明であると言わざるを得ない。ウル第3王朝にはウル都市遺跡内にウルナンムウ、ブルシン、ドゥンギを祀った廟が営造されるが、その後のシュメールの王墓については分かっていない。オーマーンやバーレーンには世界有数の古墳群があり、海洋交易に基づいた都市国家的な様相を示している。さらにペルシャでは、アケメネス朝のキュロスⅡ世墓がパサルガダエに営まれるが、これは都市と複合した石棺墓である。さらに、ササン朝の諸王はターク・イ・ブスタンに営まれた岩窟墓葬に埋葬され、外壁には彫刻などが施されているのが特徴である。

これ以外に単独の墓葬単位としていくつか概観したい。

アナトリア(11) アナトリアでは、ヒッタイトの王墓がアラカホックで知られてい

るが、装飾墓ではない。ゴルディオンのミダス王墓は、内部に木槨墓であるが装飾墓ではない。ネムルト・ダーはヘレニズム期のコンマゲネ王国の巨大墳墓であるが、外表装飾は認められるが前代との関係は明らかではない。

インダス(21)、(22) 南インド インダスでは伸展葬の土壙墓が中心であり、特定個人墓の析出は顕著ではない。一方、南インドにはアrikamedu遺跡などに鉄器時代の石棺墓が築かれており、インドの中では特異な位置を占めるが、むしろローマとの交易を示す遺物が出土しており、海洋交易も考慮に入れておくべきだろう。

北アメリカ(25) 北アメリカは特定個人墓が目立たない地域でもあり、アデナ文化やホープウェル文化などではマウンドを築造しているがその中に明確な墓葬用マウンドは顕著ではない。神殿の基台が主体であり、埋葬塚としての発展が見られないのは中米とも共通する新大陸の特徴でもある。

マヤ(24) マヤでは、古典期にいくつかの王墓が知られている。ティカルでは階段型の神殿内部に墓を築き、前面に石碑を立てている。また、パレンケ遺跡のパカル大王墓では、レリーフが施された墓室内壁や石棺があるため、辰砂で彩られた赤の女王墓とは対照的な、マヤでは希少な装飾墓であると言えるかもしれない。なお、同じく古典期後半に該当するコパン遺跡でも王墓と目される墓葬が確認されている。いずれも塚の頂部に建てられた神殿の床面や側面から墓室へと下りてゆく通廊式のものに変遷してゆく。

ペルー(23) ペルーではモチェ文化、シカン文化、ワリ文化などで王墓が知られている。とくにワカ・ラハダに所在するシパン王墓では、伸展葬で木槨に納められた王には金製の装身具などが共伴し、殉葬者も確認された。シカン文化の王墓では逆位に座した姿勢で王の埋葬が認められている。いずれも特定個人墓の析出過程は認められるけれども、装飾墓とは言えない。

ナイジェリアーベニン(29) 当地域ではイグボ・ウクゥに加飾された青銅器などを副葬した王墓と目される墓葬が確認されている。その後の王墓の展開は明らかではない。

ポリネシア・メラネシア・ミクロネシア(27)、オーストラリア(26)、アマゾン(30) オセアニアなどの地域ではナン・マトール(マドール)のような石造記念建造物があり、石造の王墓も知られているが、装飾古墳ではないようだ。特徴的なラピタ土器を副葬する墓葬にも階層差は想定されるが、王墓と目されるものは知られておらず、装飾墓の有無も判断としない。ジムバブウェも南アフリカのモニュメントとしてよく知られているが、装飾墓が確認されたという報告は聞かない。また、アマゾンでは簡素な土壙墓の存在が確認されているが、装飾墓と見られるものは無いようだ。

タイー東南アジア(31) タイー東南アジアでは、青銅器時代から鉄器時代にかけての



バンチェン遺跡では彩文土器を副葬する墓葬が特徴的で、副葬品の多寡による階層差も確認される。しかし、特定個人墓が共同墓地から析出されているかは明確ではなく、装飾墓も確認されていないが、洞窟壁画らしきものはあるという。なお、インドネシア・スマトラ島のタンジュン・アラには、彩色壁画を有する古墳があるようだ。

トラキア(32) プルガリアのシュベシュタリには、トラキアの城塞都市が築かれており、やや離れて陪葬古墳と共に王墓が位置している。また、カザンラクにもセウスス3世墓があり、馬車などの彩色装飾を室内全面に描いた装飾墓がある。

#### 4. 装飾墓の時空

以上の概観から、特定個人墓の析出と装飾墓の登場には密接な関連性がうかがえることが分かるが、前稿の墓葬の変遷過程の3つの理念型を対照しつつ議論をさらに深化させた。すなわち墓葬単位の外部要素を自らの変遷過程に取り込むことで王権の神聖化を強めていく変革型、墓葬単位外の要素を極力排斥し、前代の反復と強力な階層規制を貫徹することで維持をはかる保守型、相違する墓葬単位との邂逅(刺激伝播を含む)を契機に墓葬の伝統が崩壊し、階層的な不整合が定着するものを衝突型の3つの型に整理して装飾墓<sup>(註9)</sup>の登場を位置付けたい。第1世代であるエジプト・ヒエラコンポリスH墓を別にすれば、圧倒的に第3世代以降であったことがうかがえる。つまり、王墓と位置付けられるような、規模・構造の面で他とは隔絶した施設を伴う墓葬が確立し、それが縮小過程に向かう段階で登場し、拡大するといった共通する傾向をうかがうことが出来る。以上のように、墓葬の変遷過程を整理しつつ装飾墓の展開を合わせて考えていけば、装飾墓の登場はこの段階は、墓葬に表現される被葬者の社会的な性格が、神聖化から世俗化へと転換する時期に重なっていることがうかがえる。したがって、装飾墓が登場する契機とは、特定個人墓を析出する方向から個人墓が普遍的になる方向へと転換する境界点に、墓葬の変遷過程上では位置付けられるといった想定が導き出せる。つまり、「特定個人墓から普遍的な個人墓へ」が装飾墓を生み出す直接契機と言える。

ところで墓葬の変遷過程上、もうひとつの画期を見出すならば、特定個人墓が共同墓地から飛び出すことも装飾墓の登場と相並ぶものと位置付けられる。すべての墓葬単位で観察できる訳ではないけれども、特定個人墓の析出と装飾墓の登場は、すなわち第2世代、第3世代への移行は墓葬変遷過程において被葬者に仮託された社会的な性格が大きく変質を遂げる段階であったと見なすことが出来るだろう。言うなれば、階層的に構成された墓葬の位置付けが、前者は世俗から神聖化へ、後者は神聖から世俗化へといった逆転を見出すことができよう。

このような大きな変革は、時間観念の再編と密接に結びついていることは、すでに前稿で指摘したところであるが、それを踏まえるなら、特定個人墓の析出時点で創出された直線的な時間を、ふたたび円環的な時間へと揺り戻そうとする力学の中で生み出されたものが装飾墓であると位置付けることが出来るのではなからうか。神聖か世俗かは、階層的に構成された墓葬を読み解く上で欠くことの出来ない作業概念であるけれども、墓葬が世俗化の方向へ展開することで、神聖性の創出機構としての墓葬はその活力を失い、編纂された歴史の誕生へと道を譲るのである。<sup>(注10)</sup>このメカニズムについては、また改めて論ずる機会があれば、稿を改めたい。

(かわの・かずたか=九州国立博物館 企画課企画課長)

- 注1 歴史とは不可知である現在の表象である。そのような歴史認識における主体性を定義し、歴史哲学を論じたR.G.コリングウッドの主唱にしたがう(R.G.コリングウッド(小松茂夫・三浦修訳)『歴史の観念』紀伊国屋書店 1970年)。
- 注2 M.サーリンズは、白人との接触や外来王について論じた構造人類学の実践の中で、構造と歴史を繋ぐものは文化であると喝破している(M.サーリンズ(山本馬鳥訳)『歴史の島々』叢書・ユニベルタシス 法政大学出版局 1993年)。
- 注3 構造化された過去への注意喚起をはかったのは、レヴィ・ストロースである(レヴィ・ストロース(荒川幾男訳)『構造人類学』みすず書房 1985年)
- 注4 J. フレイザー(M.ダグラス監修、内田昭一郎・吉岡昭子訳)『図説 金枝篇』東京書籍 1994年
- 注5 河野一隆「森の王」(『京都府埋蔵文化財論集』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996年
- 注6 比較研究における時間・地域の枠組みは方法論的に大きな問題である。この定義を詰めていけばいくほど、モザイク状に異文化に由来した要素が増加して、特徴が霧消してしまうからである。ここでは、本質規定をしつつ比較するといった立場をとる。  
R.ベネディクト(米山俊直訳)『文化の型』講談社学術文庫 講談社
- 注7 数の都合上、以下の墓葬の概観についての参考文献を割愛する。
- 注8 装飾墓あるいは装飾古墳の定義はきわめて曖昧だ。基本的には遺骸が納められる埋葬空間の機能性と関係があまり感じられない加飾された墓葬を装飾墓と呼称するが、その装飾も築造当初には何らかの意味をもって機能していたに相違ないからである。また、墓葬の外表装飾については、装飾墓としては、墓室内ほど積極的には評価されない。しかし、装飾の無い墓葬が主体となる共同墓地の中で、装飾墓は意味を持っていたに相違なく、その意味で特定個人墓と同じ取り扱いが求められよう。
- 注9 ヒエラコンポリスH墓は、装飾墓の人類史的な意義を考察する場合、たいへん大きな意味を持つ。それは、本稿で論じた墓葬の変遷過程と装飾墓の登場の要因に該当しない事例だからである。これはエジプトとメソポタミア間の文化的影響を論じたフランクフォートの議論を

踏まえ、機会があれば議論したい。

H.Frankfort, *The Birth of Civilization in the Near East*, Williams & Norgate, London, 1951

注10 かねてから初期の王権の性格を神聖王権、経済構造を威信財経済と規定して、日本古墳時代をひとつの例として素描してきた(河野一隆「威信財経済の論理」『季刊 考古学』第117号)。隔絶的な質量を誇る墓葬が登場・維持される社会的な背景は両者であり、これが衰退することが編纂された歴史が誕生する前提となったという論理についてはいずれ詳述したい。

